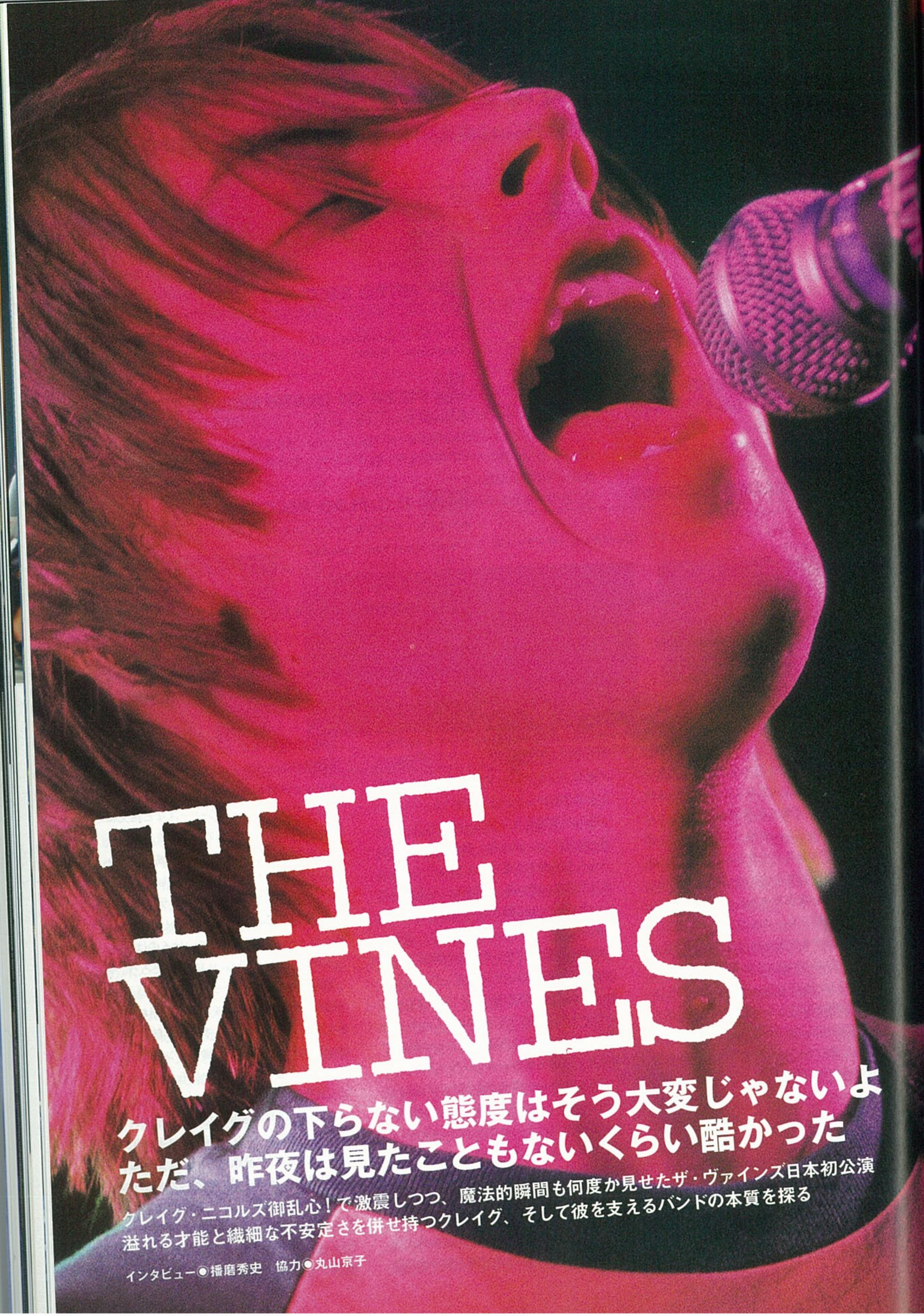
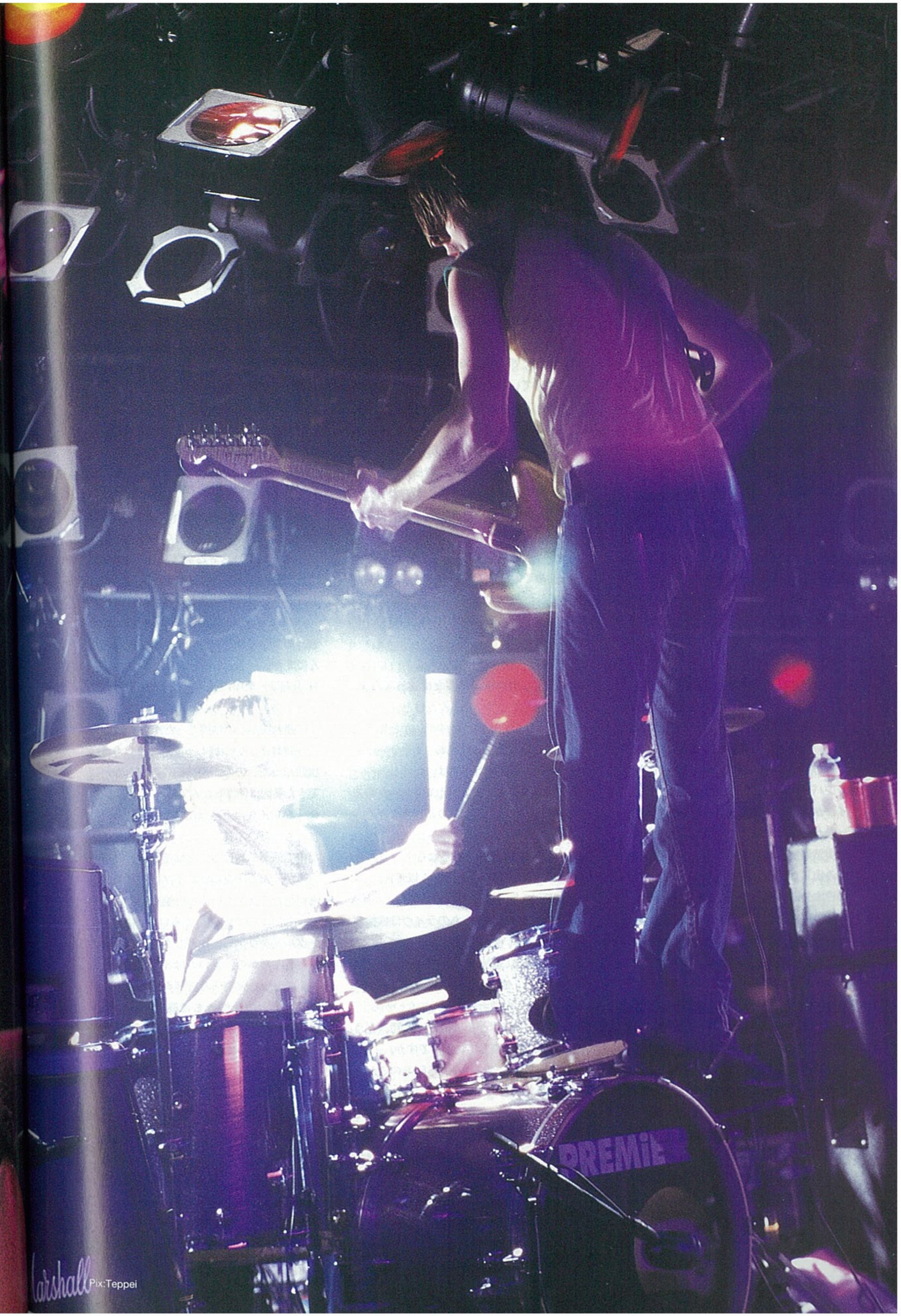


THE VINES

クレイグの下らない態度はそう大変じゃないよ
ただ、昨夜は見たこともないくらい酷かった

クレイグ・ニコルズ御乱心！で激震しつつ、魔法的瞬間も何度か見せたザ・ヴァインズ日本初公演
溢れる才能と繊細な不安定さを併せ持つクレイグ、そして彼を支えるバンドの本質を探る

インタビュー◉播磨秀史　協力◉丸山京子



Pix:Teppei

クレイグは旅自体がそんなに好きじゃないんだよ
クレイグは自分の部屋に閉じこもってテレビを観ている方がいいタイプなんだ
日本ではテレビの内容もわからないから、それでイラついてるんじゃない？（笑）
それをオーディエンスに向かってぶちまけてるんだろう

こないだのロンドンのブリクストン・アカデミーでのショウは最高だったんだよ
ステージに上がる前に「この曲はこんな感じでやろう」って話し合いもしたし
クレイグも凄く真剣に臨んでた。演奏もばっちりだったし歌も良くて
観客も乗ってて、曲間の余計な間もなかったからね

ザ・ヴァインズの日本初ライヴは、ある意味滅多に観られないようなものだった。メインマンのクレイグ・ニコルズ（Vo、G）が一切取材を受けないということになってしまったので（プロモーション来日なのに！）、心配しながら観ていたのだが、数曲を過ぎた辺りで「ドラッグないの？　マジだぜ」と言い放ったり、どんどんクレイグの様子がおかしくなっていく。かと思うといつの間にかギターのライアンはステージから消えていて、曲の途中でパトリックもベースを放り出してバックステージに足早に去って行ってしまった。辛抱強くクレイグに合わせてプレイするドラムのヘイミッシュの前で、アコースティック・ギターを弾きながら即興で歌うクレイグ。「奴らは怒っちゃったよ〜」と。

ヘイミッシュも席を立った時、正直、もうこれで終わりだと思った。クレイグが不安定な人物であることは以前から伝わってきていたし、このまま一人でずっとショウを続けられるとは考えられない。しかし、メンバーはステージに戻り、次の曲でクレイグがステージを降りる振りをしてメンバーをからかった後は、徐々に回復。何曲かで突然奇跡のようなバンド・マジックさえ生み出しながら、ザ・ヴァインズは初めての日本公演を何とか形にした。

その不思議にマジカルな瞬間がなかったら、ただ単にどうしようもないライヴだっただろう。個人的には、ライヴをやらないレコーディング・バンドになってもいいんじゃないかと思う。しかし、メンバー自身も“最悪”だったと認めるその中でも、ザ・ヴァインズは彼らの魅力の本質をかろうじて見せてくれたのだ。泥沼の中でキラリと光ったあの何かの、全てを見せてもらわなければ。翌日の大阪ではクレイグのご機嫌も回復し、アンコールまでやったらしい。う〜む。フジ・ロックに期待したい。

それにしても、どうしようもなく微妙なバランスの上に成り立っているバンドである。元々は友達同士で始めたのに、いわゆる“仲間”や“同志”の一体感があるようには見えなかった。常軌を逸した言動に走るクレイグを、メンバーたちは見捨てずに何とか支えてはいるものの（クレイグがそこに甘えている部分もあるだろう）、より踏み込んで彼の問題を解決しようということでもなさそうだ。過去に試みたものの、うまくいかなかったのかも知れない。

クレイグの「取材は一切やらない」宣言の中、彼の目を盗んで（？）行なわれたインタビュー。リズム隊の二人は、包み隠さずバンドの現状を語ってくれた。

——初めての日本ですが、ライヴの出来はどうでしたか。

パトリック・マシューズ（B：以下P）「悪かったね」

——ははは……オーディエンスは？

P「演奏し慣れている客とは違ってたよ。凄く盛り上がってくれるんだけど、どことなく違うっていうか。ノイジーかと思うとシーンと静まり返ったりね。『そういうものだから』って言われてはいたけど、やっぱり違和感あったな。加えてクレイグのあの態度だろ？　どんな国のお客さんだろうが、うんざりしない方がおかしいよ」

——（苦笑）点数をつけるなら？

ヘイミッシュ・ロッサー（Dr：以下H）「う〜ん……40点」

——もともとあなたたちのライヴは振幅があると聞いていましたけどね。

P「演奏自体に満足行ってなかったわけじゃないんだ。僕がライヴの途中でステージを降りるなんてことはめったにないから」

——前半クレイグが不安定だった間、どういう気持ちで演奏していたんですか。

P「僕たちとしては、やれる限りのことをするしかないと思ってた。ところが突然、クレイグが口汚い言葉でののしり始めたんだ。ある程度だったら構わないと思うよ。オーディエンスの多くは、クレイグがヒステリックな態度を取ろうと暴れようと、気にしないことが多い。例えば僕には最悪だと思える時も、オーディエンスはあまり気にしている風じゃなかったりする。でも昨夜みたいに誰かれ構わず罵倒し始めたのは、あまりに酷いと思ったんだよ」

——不思議だったのは、全員の波形がずれながらも時々ピッタリ合って、「凄いな」と思える瞬間があった点です。

P「昨夜のライヴにもいいと思える瞬間はあったよ。普段はあまり演奏しない曲も3曲やったしね。色んなことがあった割にはエキサイティングだった」

H「このバンドはジェットコースターみたいに、常に先のことは見えないんだ」

——セット・リストと全然違っていたのはクレイグがやりたい曲をやるから？

P「うん、そういうことが多いね」

——ヘイミッシュは何とかクレイグに付き合ってましたけど、いつも保護者的役割なんですか。

H「実際、楽屋に戻っちゃったパトリックとライアン（・グリフィス：G）をステージに連れ戻したのは僕だったんだよ」

——ははあ。いつ終わってもおかしくない状態だったものの、最終的には何とか形にできた要因は何だったんでしょう？

P「クレイグの下らない態度に付き合わされてもうだいぶ長いことになるから、そんな中で演奏し続けることはそう大変じゃないんだ。ただ昨夜のクレイグは、これまで僕が見たこともないくらい酷かった。このセットになって15回目くらいだけど、“イーヴル・タウン”の出だしをトチってしまったもんだから、あいつは3分間ずっとヘイミッシュを罵倒する言葉を浴びせかけたんだ。それでも僕たちは演奏を続けたけど、ついにライアンがステージを降りてしまい……その後何をやったんだっけ？」

H「“オータム・シェイドⅡ”」

P「そう。ところがクレイグがバカみたいにテンポを落としたもんだから、ヘイミッシュが合わせられず、それに対してクレイグは『このどアホ』呼ばわりした。僕がステージを降りたのはその瞬間だよ」

——それは酷いな。

P「だろ？　そんな風に、人に暴言を吐かない限りはどうにかセットを終わらせることもできるけど……結局、どうにかライヴを終わらせることが出来たのは、クレイグがようやくそれをやめたからさ」

——ツアーが4ヵ月近く続いていることにも原因はあるんでしょうか。

H「ああ。僕だって家に帰りたい気分だ」

P「確かに長く続いて、気分が滅入ってしまうこともあるよ。でも終えたばかりのUKツアーが凄く良かったことを考えると、なぜなんだろうって不思議なんだよね」

H「時差ボケのせいかもな。あいつは旅自体がそんなに好きじゃないんだよ。僕とかパトリックは色々な国に行くのを楽しんで、ヨーロッパでも観光したりした。でもクレイグは自分の部屋に閉じこもってテレビを観ている方がいいタイプなんだ。日本ではテレビの内容もわからないから、それでイラついてるんじゃない？（笑）。わからないニュースを眺めてるだけでさ。買い物に行くにしても、言葉がわからないからどこにも出たくないって感じで、孤立感を感じちゃってる……のかも。それをオーディエンスに向かってぶちまけてるんだよ」

——こういう問題があった時は、みんなで話し合ったりするの？

P「特に問題を抱えてるってわけじゃないんだ。もし時差ボケの解決法があるとしたら、話し合うかもしれないけど（笑）。何か特定の問題があるわけじゃないから、話してもどうしようもないっていうか……結局はライヴをやるしかないんだ」

——パトリックはクレイグとの仲は長いけど、昔からああいうタイプでしたか。

P「ううん。あそこまでアグレッシヴな態度じゃなかったよ。ここ最近、ってことでもないけど、昔からずっとそうだったわけじゃない。徐々にそうなっちゃったんだ。たぶん……（言葉を選んで何度も言い淀む）あまり意地悪になり過ぎずに言うにはどうしたらいいんだろうな……スターであることが原因なんじゃないかと……いや、それも違うな。複雑なんだよ。彼はもともとアグレッシヴな人間じゃないんだ。なのに、最大限に努力してシンガーの役を演じてるっていうか。ボロボロの説明になっちゃったけど、何となくわかってもらえるかな？　何かが彼にそうさせてるっていうか……」

H「もしくは完璧に頭がイカレてるってこと。医者に連れてったら、症状と処方箋の長いリストが出るはずだ。たまたまバンドをやってるから、誰も医者に連れてってないだけだよ」

——……例えばレディオヘッドのように、自分たちのやりたいことだけをやれるようにバンドを運営して、バランスを保つということは考えませんか。

H「（苦笑）それが出来るようになるには1,000万枚アルバムを売らないとなあ」

P「僕たちには底をつかないだけの資金があるわけじゃない。ツアーで黒字を出すしかないから、短期間にいくつものライヴをこなさなきゃならないんだ。こんな快適なホテルに泊まらせてもらいながらね！」

——昨日のショウのように嫌な思いをすることがあっても、それでも一緒にやっていきたいと思わせるクレイグの魅力って、何なんでしょう？

P「簡単なことだよ。凄くいいショウが出来た時は、『一緒にやってて良かった！』っていう満足感が得られる。どんなバンドもそうなんだろうけど、ツアーでは煮詰まってしまう時があるんだ。でもイマジネーションを働かせ、形にすることができるのが音楽だ。ま、それ（作曲）も家にいないとダメなのかもしれないけどさ……」

——ってことは、レコーディングの時はクレイグも安定してるんだ？

H「スタジオっていう一ヵ所にいられるから、気分的にはリラックスしてるよ。今回レコーディングしたのは凄くメロウな環境だったし、ライヴをやるのとは随分違う。疲れるのは移動の部分だからね。だからそれほどクレイジーじゃなかった（笑）」

P「それにスタジオでは、ロブ・シュナッフ（プロデューサー）がいたから違ったのかもな。僕たちはクレイグに歌わせなくてもいい。それはロブの仕事だ」

——なるほど。ちなみに今までで最高のライヴはどんな感じだったんですか。

H「最近だと、ロンドンのブリクストン・アカデミーでのショウだよ。ステージに上がる前に『この曲はこんな感じでやろう』って話し合いもしたし、クレイグも凄く真剣に臨んでた。演奏もばっちりだったしクレイグの歌も良かったし、観客も乗ってて、曲間の余計な間もなかったからね」

P「そういう時は最高なんだ。自分や誰かの演奏のミスに苛立つ時もあるけど、本当に乗ってる時にはそんなこと全然気にならないからさ。そもそも僕たちの曲はそんなに複雑じゃないんだし。問題なくやれれば自然と曲も盛り上がっていき、曲がどういう方向に進んでいるかとか、自分の演奏はどうかとか、あまり考えることもない。うまく行くかどうかは運次第なのかな」

——今、バンドの未来をどのように見ていますか。

H「今（のツアー）を早く終わりたいよ」

P「どんどん大変になってきてるね……。ま、どうにか今回は切り抜けたけど」

H「明日の大阪でのショウがどうなるかは、誰にもわからないよ。もしオーストラリアで酷いショウをやったら——例えばインキュバスとのツアーの時みたいに、僕たちを海外に連れて行こうと思うバンドも出て来なくなってしまうわけだし。陳腐な言い方になっちゃうけど、一日一日を乗り越えていくしかないんだろうな」

日本公演を終えた彼らはオーストラリアに戻ったものの、リラックスするどころか状況は悪化している。5月27日のラジオ放送用ライヴではクレイグと口論したパトリックが1曲目途中で退場してそのまま戻らず、日本でもやっていたクレイグの“カメラマン蹴り”も問題になった。翌日のショウは「病気のため」キャンセル。そして何と、名誉挽回が期待されたフジ・ロック出演も中止に！　6月末から約2ヵ月の全米ツアーは行なわれるようだが、果たして今の彼らはそれを乗り越えられるのか？　■